日本歳時記

夏

日本紀略 紀奉之四

夏 漢書律曆志ニ云ク夏ハ假ナリ假ハ大ナリ物ノ大ナルモノハ假ナリ故ニ

千金方にいはく凡人の面をなでらるるなり
人として面皮あつくなまつ風とおそるべし
又曰五七十二日苦き味を食物とすべし辛をまして
脚弱と書るべし
内經にいはく五月冷石鉄物をもて物をとれる
なれば大に人の用と換と
書経に穀にいはく五味をもて穀あるを穀を食
これとらもし穀よりなるべし
金匱要略にいはく五穀の内を食すべしと
記事我蓋書と物をもて苦菜と食べしにいはく

これと等しし
凡今廣義にいはく刻より九月にいたるまで一切濕物
及水とのむべしと忌又ものを盥洗べし
又いはく五月腎氣衰絶と有よ房色をもて
氣と傷り毒と換ば宜戒之
又いはく汗乃衣裳に透ると日ふ病一又これと等
出ハ多くは痛るとせれ
要書書叢書にいはく盛暑熱を御あ冷水にて洗
べしと脚と絶相女むべしや沐浴とすべや卯よ
禁べし又冷水足と濯べし

又いとくるしき時分なれば生姜をくわすれば癒
ともし冷なる故病を生ず
又曰二月八日心腹腎臓の精化して水となり秋水新
外凝花保齋一七清氣を固とし雪の勢地をとらんが
脉中潤暖ちり生成果蓏氷水冷淘粉粥蜂蜜花含
へうし食をしれば多くは秋時より必瘧病とうまて
冷水をいへ沐浴しる面を洗ひ背を拭く事なかれ
人をして寒熱眼睛くるしく筋脉頑迷し霍乱吐瀉筋攣
乃痰をはき心風を動かすなれば抵中の人紙
をもく扇を揮しむる事なかれ汗孔毛孔開展をもく風邪

へ入りこれを世人として風痺不仁諸濕蹇渥の疾
を逃しむ年壮にして即喜とるべしと雖病根
を移ろはず氣衰ふる人を撞教乃窮を逃るべし
孫三人のいとく文月四日に傷寒冷水とのみ瓜桃生冷
の物宜くのみ食しかくれもくをれて秋冬瘧病
をまつふ事しきりなるべし
文月暑に傷られもく身体をれいる痩せる人行伝
これを文瘦しいふ病症よりもく某と服すべし
又万蔡集十六巻大体忠物喰咲痩人奇

石麻呂爾吾物申夏痩に吉跡云物曾武奈伎
取食　鰻鱸を八夏痩と注せる事蜀書に見
見えたり　詳しげ注せる事なり

四月

朔日　國信今日より八月中の十五日まで論と為べしと日と云
ざしいよ吉のに世ひくしたり

八日　灌佛日なり灌佛とは佛像を
ふよ都梁香とふく香水にて爵金香とつく和
名抄に丘澣香と云事也

て英色水にて安息香とふく香水にて佛像を
洗く　こゝにて月建は佛像を洗ふ水にて
な　朝ふく今日佛に水を注せしむるの雅古天竺
の佛家なりもまたなん

十五日　盛屠の祭夏今日より十五日まで
いとりて祭る先と解云ふ乃九十日
よあすの事朱豊勢名と云ふ乃九十日
たりを祝苑云那ふ乃云ふなり

晦日　沐浴

今月梅雨に先立て百乃海なりて穢めの為

四家麿より乃そ[illegible]うげよ書ゐ霜面ゐ[illegible]く面ゐ
梅面ゐ[illegible]ゐ月ゐ[illegible]ゐ[illegible]と久く畢ゐ伝これとさうひ日
と云天宝[illegible]く日本[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ
功多し[illegible]れい唐[illegible]ゐ典ゐ定役ゐ功ゐて造[illegible]ゐ[illegible]ゐ
ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]

たゝく解るゝ塩羊ハ塩湯にてゆでさうけ湯ゝ洗さ
し三ぺんと若茶の心用うべしてうり
四月ごろ白へこうの芽豆。大豆。若わ豆。胡麻。胡荽。蔓也
純陽の月なれハ精気を保ちて熱性ゆゑ次と月令
蜜蜂の巣ゝ出り又ハ月暴怒しんを傷事ゝなる也
これと共也ハ秋冬瘧とうまゝ又寒水にて面と洗
ひ出すべき事とおもむ
五月ハ味丸と服せハ六月ゝ始くのむべし男林集方に
玄夏ハ腎気丸うゝ絶し又ハ地黄丸と服べし
冬ハ味丸と狼ゝ絶ゝ

地黄丸ハ三分用ひ物ゝ八味丸ハ六味丸に附子肉桂と
かへ三ゝ又薬時直前ゝ男女に加減八味丸ハ六味丸ゝ
肉桂又味子とかへ三ゝ腎気湯ゝ八味丸ハ六味丸ゝ
作す蜜丸生地のかわりゝ六味丸より切丸大
ゝ丸ゝ丸ゝ久しく服ゝ絶ゝ
四月乃土候ゝ一螻蛄出ゝ二蚯蚓出ゝ三王瓜生ゝ
立夏のこ候なり雷ハ若菜麦ゝ又蘆筍ゝ
六麦秋ゝ大小満の三候なり
立夏巳刻十分夜半三刻五十分小満巳刻
十八刻二十分夜四十一刻四十分 月令廣義

五月　節と芒種と云中と夏至といふ○五月の異名　仲夏　皐月　鶉月　律と蕤賓と云○五月の和名をさつきといふ田うゑ時せうと奥氏物語五月雨

四日　沐浴　粽と裹ひしへし　俳粽と裹ちまきとも○と用ひず　粽米とさんあくしく　俗米ちまき　沸湯に入て　あるいは又沸湯中に入てあくにんし　米とりの米粽分けてもあるべく　沸湯にて煮て　九ちまき　俳あるとは米と麻とにて　引しぼりし　俗にくつき米　ちまきよし　又粽と煮る　稲葉乃煎汁　ちまき煮へし　中月令廣義に見えたり　唐代は端午に粽を食し　角粽　茨粽　角黍　百粽　九粽　角粽とは粽にて粽を角にしたるは

又雑ちまきにくしに又義角にくしに又竹の筒にてもまた祥乃縄のあやにくしに　或又色糸を縄にて

ちまき数珠のごとくつなぎ　我国にも古へは粽と変乃事にてかくの如くあんこれは

伊勢物語にも人にもとらかたの粽と出るとかく

又指図集十八乃図書にもちまきとかく　或たんこれこと

をして九ちまきをあるもあり　ちまきを乃至にて

つくるもあり　俗に角粽とも角黍とも云　今日或は

明日粽を親戚に送へし

○函信　今日艾菖蒲を屋内のさに挾む

粽を函に兼用乃事　艾をもとひて人形の

ごとくにして戸上にかれば毒気を去ると見えたり

國俗艾菖蒲とのさに掛むとす名きさきを
弘仁式に五月三日平旦に菖蒲蓬を取て菊殿の
前にとくこあり八こ付りるとみしうり
又指艾り掛ふ五月四日五殿寮菖蒲裏殿舎菖蒲
也乃り指平納を白雄乃ものよ

タかしいとあや色をうるを海紀をうる新
寄り出る蓮を乃やと

五日

端午ト云又重午ト云 雜紀九齡上大保曆序ニいはく漢朝元十六年八月
端午節ニ又宋書ニ表ニいはく月惟仲秋日重結午ニうる紀ハ九齡序
乃又日ニ月ニ端午ト稱ス又日ニ月ニ重午ト稱ス

國俗今日粽をくらし菖蒲酒とをむ

此今日より麻の衣とまをく八月晦日ニ至
粽とくらし如る緩部紀ニよりを屈原ハ月五日
ニ汨羅ニ投して死と楚人これとあを重
午ハ日に毎ニ作間れ中丑者と婦人に
投してもれと寄り漁の哀弔乃時屈原乃酹
同といふ事の海濱とを祭りしに一人来て三
閭大夫と名乗同ニ祭くいをく我毎年ニつる
事ハ蛟龍乃ゝ多ニ奪ふ物ニ惜ハ棄れとも部ニ
楝樹の葉とをくるのとをつくる綵の糸とて

結〻しこれ二種ともに姫路乃せうゆ〻と云
今日粽と食ふハ此ぎをなんとゝ云今度義経
し屈原の姉名を襲これとはくゝて屈原と申ひき
原と云人をゝり又粽を無鬼こゝゝ屈原ハ楚ち
切くこれと食ふハ鬼を清伏する義なりと安倍の
晴明の抜くの刀をゝりかうやさしの俊綱をゝに
抜なり給ふ伝義をたゝてこんや周易の風を起す
とゝろハ荒無者と云く御粽をつくゝ焼て粽
ちれこれ澱湯和包裹をくゝ多くの教女ちう
ゝゝゝゝ作り給ふ五月一日生
す故ゝ澱湯

包裹をくゝ多数せす又菖蒲湯をのむ事家の雑記ゝ年
日菖蒲をゝくゝ作乃ゝくゝ細末して酒ゝ
うゝてこれをの夫ハ湯気を助を年をのぶ也
ゝり山沢九節乃菖蒲ゝゝゝ章菊ゝ
作ゝ菖蒲酒竟根縁
○又ゝ今日薬として菖蒲ゝゝゝ
十種ゝゝゝ色ゝ
ゝ作りゝゝゝ
又菖蒲と御帳ゝゝ
作ゝゝゝ延長武年根源ゝゝ又根とゝ
菖蒲ゝ作ゝ日記ゝ

博奕盛時記 巻四

博奕盛時記 巻四

按ずるに風俗通に五月五日五綵の命を結びて
臂に掛くれば百鬼を避く人をして瘟疫とやま
ずぐらしむ一名を命縷一名を五色縷一名を
續壽と云と載せり又按ずるに端午に
雜條と云て合歓と結ひて臂に纏ふ云りかく
の如きこと也

○又世俗に今日菖蒲湯と用て沐浴をなすなり
按ずるに大戴禮に五月五日蒲菖の沐浴をなすと
楚辭に也沐蘭湯と云へり今人の菖
蒲湯と用て沐浴をなすは是に因るべし

○又今日婦人女子たるもの菖蒲を頭上に插す又
勝鬘夫人の如きはこれを病と深くと信じ用ひなきり
案附雜記に端午の日菖蒲艾を刻てゆきん形に
似り又を萌蓋の形にこれを常に用ひ邪
氣を除と云せり かくの如き信ずやを所なり
ゆえに明和是天中節旋記菖蒲艾雄黄
又壺觴の作に玉燕銀瓶艾虎軽
○今日京師の俗に織ふく競るあり張衡七日の織女
瀾斗として乞巧のりを敷二千疋朝日よりの出とそ
ろへて一二の書と定めあり日の裏来と思しそ又思ふ

二つは日蓮上人勝負乃本にて石塔八西の方に楓茶
ばり色よりかはて淡くなるとくれなるとなるなり又
抱れた法人雅集とあり次は抱れあくてうハ西せくて
大なる桜の樹よりのりて　いやとなるに見るとなりる弱
附は横長なる岩石なりう立てるものい塚れあくてうに
あつあるさうは抱をしくてこひなるもくさせあるると
又にてるうちに雅集れかへけこあばるんべるはは
こくふ作抱とつ作くるる乃時より　こいはすのなく井
なつ書るを完をとこぶがくくに號乃家り落りて
横こ乃れ家はいかちに和いるとこ紙子まくせよりこ

鳥よあり事をうしあり又人名川中まてこ狩
ばて川はとちに衣裳とぬくしてうるとなくこひ
潮音とたるくとこ寄人の縁たるなるハ
こにたるうす歳るをるくもり元賀義の村民い社人
なうす寄日はあくされこをつ移は化あ乃出をいこ又
我あれ出をを人はなるくこ縁出をいむ西地
むしハ大間故虚殿にて五日に競る弾射八事
なりて五位以上を為るとなるし延喜式にあるせり
祇多御情はいくくに月六日に年天皇あやめ代うこと
うを行くく武徳殿にて紗幸なりて六府弾射八なるなり

五日八幡宮に参詣する人多し
五日八幡宮に競馬あり
五日より競馬とりはじめ
拝殿の文昌雅郷の額午日之潮柳と
あるをみてまた今日とりはじめ
○今日山城紀伊郡淀の里の森の桑をもて
灌仏とをもて競馬あり浮世を延喜式に
乃神社なり日本後紀に暦別雷神の別也
ひとりとなりたちて三所ひとつ
ひとりとなりたちて三所ひとつ
ひとりとなりたちて三所ひとつ

[illegible]紀伊國の人民形[illegible]こうらく[illegible]の義にて[illegible]
作り武木と[illegible]刀のごとくなづけ[illegible]
作りしの[illegible]辛い風俗異形と云のごとくなるものとして
人民形とこれをなづけ[illegible]
或甲冑とて世紙[illegible]
先[illegible]
いろくの[illegible]
たとへ作[illegible]
[illegible]
て[illegible]

[illegible]これは作[illegible]
雜記[illegible]
又土[illegible]
[illegible]
形に[illegible]
[illegible]
○今日[illegible]
又日[illegible]
[illegible]
日本紀[illegible]
[illegible]

又章第云り詩又今朝園草は宜男とのり歌ふ
園草乃形小芋園今朝盈握百草の香こゝ有り
百草のけを搗こりて煎こゝ青こゝ青葉に配さと
こゝ百病癒癒こゝ貼こゝて寄こゝの青葉こゝ功十倍
ぜり又今朝日未[illegible]お附百草と搗こゝ汁とつき出こゝ
在所又和こゝ餅こゝ作こゝ陰こゝ一切の金疾こゝ治
むと月令廣義又月令廣義こゝ月こゝ正こゝ百草と取こゝ牛膝こゝ陰こゝ陰こゝ一切の金疾こゝ治
月こゝ正こゝ牛膝こゝ陰こゝ陰こゝ百草こゝ取こゝ牛膝陰陰百草
百草こゝ百草こゝ八毒草こゝ百草こゝ百草こゝ百

もゝぢの天痛快讀雑談

十二月　八日竹と後栽へし事書に入月十二日と作辭
日とす又作遠日ともいふこれ日竹とうゆゑいかゝ
所に浦と云ふ所あり

梅花　体語

八月淫雨ふりこれと梅雨ところつく又微雨ともかゝり
梅雨は中肥ゑに蓴菜蕾石榴樫樫たゝの枝と多ひ
て云へゝし月令廣義に見えたり八月蓴菜生て
つゝし薔薇水梔子と云ふ又蓴菜人物と
もし記ずと奴僕事と慶しおこたりて人家刺網

るゝし梅雨久森の中を蒙僕をして薦と切り見
庭とはてゝしむへし黄蕎を書籍遊拘食拘番と略し
新に熱しる蕎麦木菜蕎流よりひ墻屋を葺ゆ人
ゝ功勝廣し又梅雨出と大雨に貯蓄と繁
もれいたれるゝ美多りと茶湯に見えたり但は
とへても絶へり要の又梅雨ゆゑ癩疥を洗へは
ゝれおとれし鬱と他りゝこれと用ゆ鬱し
やゝゝ衣洗ゆゝすゝこれと用れは疥けのもゝ
茶碗の食拘茶碗茶ゝ見えたり
梅雨お入乃洗絵ゝゝて一決し猛し焼物と

とく開人高友の後庵にあり日を入梅なり〳〵芒種
種は後五月を出梅に成神輕に成て芒
種乃後庵に行て日を入梅なり〳〵小暑の後未
に成て日と入梅なり〳〵又碎金藏に成て芒種
乃後五月に成て日と入梅なり〳〵又玉乃後庵に
行て日と出梅に成又書附に成て芒種乃
後五月に成て日と入梅なり〳〵小暑入後五月に成
日と出梅に成元禄五壬申年の後酉の日と
成て入梅なり〳〵又後是より〳〵成る後
衣紙抱よりと記録に成て元禄五年入の

物を和尾ゝを小ゆさく乃後作りあり〳〵されゝとの
成金〳〵〳〵換軒常蕎徽雨降いとく後湯之法不固
有之乾物天地流り変化之義ハ不定風雨之
時候必有正道ゝ万物日数種刈植取出入之物雖然
善夏〳〵書恐ゝこの授作ハ重み四季作書不如〳〵書ハ
此言乎ハ芒種〳〵後濃取初降之日為入梅〳〵濃取收
都〳〵日為出梅廉光乎其不差矣十月潮取ハ五穀也
世伝ハ常文生乃ゝ〳〵〳〵ゝ重量問作〳〵〳〵又月
乃中〳〵ゝ十一日にあ〳〵ゝ日あり〳〵日不淋と成不
犯淫然不食又幸酒肉日なり

梅雨は黴雨ノ梅に麻那史人の中信氏主命たる
四ふ善ずと雖も西事とのぐくとそり予甘山
生涯生八七十二候乃内夏の末三候ハ毛に
休令ーて妄説をとるなし
夏至の日井と渡水と没れい疫を防ぐと説れ乳後
志よ足こうり又夏ノ後丙丁に当る日まゝの交
とをれいたにあしこと千金方に志りとり
六月ノ初書物と乾度とをづり様と妄説よ入出ー
涉の蓮ふく渡收用ふく鳥獣ハ皮ますつきはなをく取
へし又梅雨ノ中梅刈をと義出へし

涉月米苞を改米ぬくし喪くるハ苞ゆるハるをすを秘
生ハ又夏乃日拾穀乃原と多く米苞に抜り虫ハ不出
七月天樞中脘を灸し要月のくを行うしめ保生すへし
又樹葉と保嚢とくし格致餘論よいくく古人花を柏
宿白漢味蔬し葉し拉を護也保生金水二臓西瓜史土
之胆ホ
月令よいくく是月や日出玉陰陽和平死ます男子の節戒玉又必
掩勿母漏泄智色母或進嗜欲母段和節春歌定人乱又
曰是月や可人居高明可人登眺望可人升山渡可人生蚕樹
保生人論よいくく毛月於井及溝渠乃中とるるをられ毒

ばり一尖雛毛とかくその中にとう〳〵入るゝ事もあれ
雛茸とゝもの名ことにいとこれ毒なりとかくし
此月進ずとて〳〵力をつくし〳〵見えを接すし金匠番暦より又て
こゝ又蒼蝿鯉魚雑及未熟世ゝ古果とゝ〳〵物すなれ
鼈と鮑魚とおれ〳〵く食べ〳〵又枇杷と麦肉熟麹七
れ〳〵く食るなれ月令廣義あり叢書にあるなり平金方に猿麻の肉
と食るゝなり是又金匠番暦より六月泥中の修水と
飯なるなれ魚鼈乃精脆閑にあり色とのめば癖となる
六月農人田に苗と挿〳〵又圃に大蒜小たねとう
ゆ〳〵刻日まいきとあり〳〵

又月の六候牙一陳根生牙二賜始鳴牙三反舌無聲
六廿芒種五三候なり牙四麻角解牙五蜩始鳴牙
六中夏生六夏至六月節二候なり
廿芒種五六十刻四十分夜五十九刻四十分夜五五
六十一刻三十分夜三十八刻三十分 月令廣義

六月 節を小暑と云中を大暑と云○六月の異名 季夏 月令 月建
てさとにあれつきしるゆ 林鐘 しふ○六月乃和名を水無月とあり受角とつゝとにあつ
こゝなり月らふを略せるなり

朔日 賜氷節とて今氷を食るなり物を祭て
仁徳天皇五十二年六月に額田大中彦皇子闘鶏中

ゆるしたまふよし出羽人あまのよりる路中をたやり
給ひしかの慶長庵と給りしやうなるの仏行り人紙
ゆえをして見せ給ふよ窟あり上を開みこの乃
ゆくりに作る人を給りて同世給ふよ氷室をと
ト望まその氷といいやうけて納むるうと同世
給ふ答てロしさく出と一史給りあり。あるとをとこと
あれ茅草れとあつめ氷をまもむまいう
やうなる大昼。あをたけを毛と乾く熱用ニ用ると
あんそ河望子山氷を伝徳帝ニ世給ひ給れハ
たれる虐感ありしうの年紀よひをうり毛日本

おく氷とをを初あり毛後より書ケてこれと
納く国ニ氷室と中れ作りしりを伝世て
丹波のおくふよ氷室行りくるもん又富士山伯耆
乃大ふををとりを氷と敬せしあり民間ニハ
蒼腕製せ粧とたくいく室今日食して氷をく
らふよ準ます
りんこふを氷とおさむる事あり周徳ニ渡人
職と云を氷室とつくさる安あり去を代徳き
不保ふ迷答り氷室とそんくを毛とおさめ夏
に乾く暑寒とさけんてあり氷伝せて辞ける

[illegible]毛詩に二之日鑿冰冲〻三之日納之凌陰
と[illegible]先儒小日立春北陸而鑿冰西陸朔觀而出之
と云り是[illegible]氷[illegible]
乃石室[illegible]三伏の日氷井[illegible]氷を[illegible]
[illegible]鄴中記に見し[illegible]の注
六日 粉麺を製する日なり製法は[illegible]に詳なれ
ども[illegible]
十六日 [illegible]
[illegible]八事祥とする[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]六月[illegible]
[illegible]
[illegible]事祥とも[illegible]
[illegible]
[illegible]

歳は元年より十六年まてのさるゝ所の紙十六枚所
ほとゝぎす今日一人こゑのすてゝ秋は見むとなり
たれ東坂たりのあるゝきれとも有ゝ所あるこゝ也の所
今猶とゝまる四書抽象の仮名をさいたゝ所
まゝ多くなし一行ゝ多人伝ゝきれとも遠世
江戸御年号年根源年中はゝ年をとゝ
たゝく國史をたゝ所ゝ年ゝ所ゝ年ゝ
はれ所ゝ仮の所ゝ世ゝ代年ゝ
抄　東朝の春言にゝ所ゝ人を分の
晦日　法法　はゝこれ月ゝ人ゝ所ゝ年ゝ世ゝ風ゝ所ゝ

所ゝ神ゝの部ゝ所ゝ猿ゝ所ゝ功能ゝ仏ゝ所ゝ天
武ゝ天皇ゝ乃御御ゝ所ゝ猿ゝ大猿ゝ猿ゝ猿ゝ
ゝ百度ゝ一同ゝ女ゝ所ゝ所ゝ猿ゝ猿ゝ猿ゝ
ゝ所ゝ所ゝ

これ月ゝ所ゝ猿ゝ猿ゝ猿ゝ猿ゝ猿ゝ
ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
乃同ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
ゝ所ゝ所ゝ

ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ

とかいへりさて見るに此頃は社家にて中臣祓といふものを大祓
といひ宮中のことにても晦日の大祓有て六月並に閏月あらは後
にのこかはいはやといふは後代六月をおもていふ
常楽院にも見えたり又今日川原にゆきて鹿代祓して
人形と紙をもちてふさなでてとをくへ流すなり
を撫物ともいふ

八重御祓は一名六月祓を荒和祓ともいふ又六月也
みなつきとも是夏越祓とも此頃になりて串たてあるの
草の輪とて人はこれをくゞり又夏越ともいふは後撰
夏越川のみなとよりこそてる月はは

こやなどの人すの絵ものこれ月をへしを河原
ゆくり出さく月のあるたとそくこい一りきらく
宵明日のりうことをて四月ふく蛍しとゆう
宅寄々の酒よいくて乃月つくへ四月ふくせ人寄
疑之古人宵月を此必ず門を作藤又納涼友編
作りを遊友詩歌を無恒例也不限晴日已終時月
涼を之を此歳人紀陽倉小舎人可参清月祓
を此儀之仲彼宵月十三日也 月次 山張をよれハ
張よ晴日よ張ばくさのら
九月三張しのるる作人多くひとくせり九月やを

夜三月九十日あ至いかくとり伏とハ金氣伏氣れは
ちりの所のうしりのるるかおまとれて伏まいかよ
ちくく冬氏此よかたる水よ木なり氣い火ひ
まこれおよりの所木生火なりそなるるて秋の金
ゆうの金生なるて秋ひて金ひてこなの火なのる
火毛金うて金ハ火伏ひるる所よ庚日ひまりて
るるハ伏す庚を金なり三伏とハ夏ひ月後
第三庚と初伏しる第四庚と中伏しる立秋の後
才一庚を末伏と云ハ伏ハ三伏と云ハ四十日後く
繋す脚ハ大を伏ハ狩をるなり 原西秋之

梅雨霖雨 ながき雨 書とはよる晴をとゝ〻し新蕾よりひらけ開花 表紙をとりて拾ひ集めて紙を結ぶ 天氣好日 よのうちをも一日にて終たるゝ 夕晴 晴むる晴 暴雨の暴雨のたちやく夜 ゝ屋ゝ屋ゝ屋

漆紙文書 紙をこのように重ねて縄のように作る
なり 久しく腐らず 閑蓋のうるとをとすべし 表
とさしまへうるひとをもちひて紙とあつこひろうさ
たるとあつ久し 物をつつむ紙 これ又
めをもれハ裏ちやうひ 道具ハ藏ハ月の白雨ハ書の事
子ことあるひ畫図衣服をハうるく封して長かび ず
物 衣色てハすてハ濕熱ハ蒸されてかびろ ものへ
甲冑 皮革を布 ものめん布とあるひて皮革ハ
腐ものへ久しを腐ものうるす 屋内に腐 熱氣さ
て 長雨 日 ハ 紙へ
衣服をも腐ものへ 絹を久しも平へうるす 又 黄 紅 色

布の色ハ ざやうの物をハ腐ものへうるす これと腐せ
又 物 和 義 ハ 月 衣 乃 ひて 色 つき ハ
元の汁 ひ し 洗へ 痕 又 桃 把 の さね を
すて 細 末 して 洗へ ハ 腐 月 ハ 屋 五 月
物 腐 ひ び ろ 衣服 と ハ 梅 雨 と 熱 して 洗へ と
あり 又 屋 ハ 不 俗 ひ ろ く 凡 衣服 乃 雨 ひ 汚 ろ と ハ 書
仕 ハ と 細 末 し 服 茶 と 茶 ハ 合 色 ろ れ ろ ひ る
ひ 紙 ろ へ 茶 温 湯 して 去 ひ て ひ く ろ ひ 色 ろ 後
洗 乃 ひ し 又 新 天 南 星 と ろ く 絹 の け ど 色 ろ 少 紙
茶 ろ れ ハ 角 去 又 口 病 と す ろ 付 て 洗 て も ひ し 汚 ひ

あらはれしる衣服とハ滑石天竺粉各等分を末して
付粉あるいハ又分量〳〵ゆるなるを用ひて自然又
汚しる糸ゑ埃粉とひ弱うしは 獺髓汁にてこれを
のぞくべしいちよう又麻と一所にくさて洗てもよし漆
はけなどてしる衣服と洗ふにハ杏仁門 椒等分ゑ合
研爛して汚しる所へ搔くぬり洗へハ自然又無
汚しる衣服とハ冷水にてよくもみ又ハ蕎麦と洗ふ
て蕎麦ハ黄粉 又ハ蕎麦を細末して水に
ひたして洗へハ白くなるなり 一説に長崎
新こんにゃくの葉煎を包かりくさにとひ〳〵ゑ

見ふあてく脳〳〵さぶ風ゑる葉ハこもりかく風ゑ平〳〵
千金方にいくく葉とさいく日れ平こなられ葉ゑ
うちくなる所ゑまり黄湯用ひさる葉ハ熱日ゑ
新風寒ゑ入ゑあくゑ所ゑ用ひて毒ゑ
又ゑ毒ゑ〳〵年ゑ毒ゑ新〳〵さうこう九穀乃
葉ゑ毒ゑ〳〵ゑ元世代人葉ゑ毒ゑ貯へよく保
復ゑられる葉ゑ所ゑ事ゑ〳〵ゑ次業ゑ花人ゑ
ゑひ病ゑ〳〵ゑ搔ゑるれハ葉ゑ〳〵ゑ收ゑ所ゑ
ハ、ゑ毒ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ
ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ

はんとうくすり　重へ〳〵ゆびとれハ久しくなりて重篤
うせい是事とたゝかハ良法なり　地黄　白芷　者薬
羌活　門冬　柏子　茯苓　甘草　ゆゝしく脈されハ鬱
ゝ熱なりとも能ものをたゞくさゝ沢なるをもれ乳汁
ちくなり少なり
寒熱を煩へるものハ熱くゝ脈とへ〳〵うすたゝかみて義し
ゝ熱ハ書によ脈ゝなりおれ重とハ日よ脈へうすと
腹下ハ強に熱く重へ〳〵第とも絡はゝおくるまを
ゆゝしけ重へ〳〵美の第中ゝとゝい去ゝハ日よりと
へ〳〵強ゝされハ書をしむ第ハ独を深ゝうゝ黄ゝ

独中ゝ第ゝハ五信ゝ鉄粟ゝて黄深ゝ赤ゝ去ゝ元
第と收ゝ子　女婦ハ黄主の熱湯ゝうゝく強物と
強へ第郎とひゝ〳〵強くゝと絡くゝこれと收む久し
ゝと絡てを煩す　山岩ハ門椒ゝ黄主と熱〳〵ゝれ
汁ゝく　柏姫主とゝ第ゝを深ゝ元ゝと
潛強熱するゝ又ゝ巡ハ汁黄物の汁ゝよ
深〳〵ゝて物〳〵主てを強ゝ又ゝ秋ハ百重ゝ
強物と入主ハ姫ゝ元第と法ゝよゝハ熱湯〳〵ゝり
じ月ゝれハ入黄〳〵て彼嫂ゝるゝ第ゝ彼のゝゝよゝ
へハ一第絡てを強ゝく農業強物ゝ又ゝ生

魚鱠食たくと申やうつきけてとき出指出
月令廣義に曰る白うゝ青黄黒色と称うゝ麺を
うどんのてくこねく隅とうれやうつくこ沖のやうに入
是ハ久しく指出麺を併とのして食くうしや
二月廿角を見てうゝ勝雪水を所望ろゝ魚肉
と漬し是ハ指出す
六月ゝ鱠したる茶とそまくとけい味をあく煮て
牡蠣のくさろ酒ゝ又ちうとうゝつくゝと能き
ぶ酒と茶こ茶の中ゝとるゝ此度のゝしろに
ひらかゝとゝはけ是ハ久しくけてきゝ殺出

酒をかくみてくをくしく
此月ゝ林ゝ迎ゝ新と多く成狩しゝ 此林ゝ花
不ゝ多く冥時是ハ是ハ嵐ゝ成時ゝ新て物て
すゝゝ又歳ゝ冥時ゝ新
素瓜と多冥ゝ藤ゝ腸ゝ
○鮑瓜とゝらゝ法 瓜とゝ丸ゝ
瓜乃片ゝ丸の円八九分ゝ塩と入一夜ゝ
翌日ゝ丸ゝ中ゝ
又ゝ中ゝ
後ゝ

○瓜と糟漬のこと　世俗よく瓜つけと云瓜と云
みなつけ瓜と云なくらうとこと有りひてあ氣
乃ちたやうなかくうり瓜乃片はれの間より塩八分の
やとへ入瓜ばつくるを九分四分を入櫛よへよくくとし成
うけ二度ばかりくるを九分おしをほけてあらひて塩け
乃かくなるく日よりさく瓜よ糟ちを多くあるうに
せくを瓜よへ入をくへて瓜のくをあるあやうけてをれ
うくよ塩をを重ねあんとうこに至ちり糟よも塩ま
まをくくよしたを抵糟をみよ塩ま合をまをくくう
糟多く瓜をくちたがのうり瓜多く糟すくちたがしし

信の瓢よりすに瓜とはくくし瓜ゆかとをつくるすの
をという瓢のはりり風ひりゆをしをあるをくとを
赤をあくをぬりを蓋へし櫛をはひろをを瓢へ茎を
をにつけるうをしを糟をつををくくとををさを
ゆくとよくをくくし瓜ハをを瓜くをうをけくつをを
をくし又瓢を茎をゆをを一二枝塩をの一けを茎をとを
をけくくけをあり糟をよけくれハ瓢を茎をり
瓢茎をゆをくくを平抱をう武蔵漬をして称を茎し
○乾瓢乃製法　如左人氣をとうをひをををを塩を
ををりををて糟をよ切をを切をを者ををくくをまをて

あつき入へき法 れ米をして縄をうけくわひをうり燒よ
天窓すしくいたのこく水よへ天を乾燥成る牛
縄にかうきくを乾しく能ひる時壺をこの入物をあ
重し 大氏こくをうして後沸湯をこくこの世い
交豆腐なるしとこを味あんし
○塩辛瓶乃製法 瓶を大片なる塩のつりて坪と
こをを重ね入てを日れてうけ瓶ありて後一和
こを入紙をもちをり味噌のこんさに拓こをを合せ
○乾蒸の法 豆をこを蒸をこれをとおこ入よりう
て手重を乾ら用面物一名くひ下して豆

ふかくし地打和蒸豆を焼豆を焼の原と
○豆腐滝の法 米糊をよを塩汁ととを合こう
こを豆をと英のこらの濃こけこをこを搾せす茶
ををこかくれこくをし
月醤油乃製法 ○醤油乃製法 大麦 塩各一石 水二石二斗五升
蒸てこの 先大麦をあつこくを糊ら豆をこいて
石臼こくを引をうた豆と麦乃こくを蒸て大
麦乃粉とうをの豆腐豆のひろを土麦の入麹と
なす麹麻の 味噌こ石こ斗乃を下塩

一石といれ大釜みくるく煮つめ塩湯を大ゝ元さる
しこやまをひらいてをつくりさらかとなり時絞よ
他りへ多りさめてをうし絞ゝ入をくく挿初ゝり
家氏間ゝ重ゝうゝし去ゝ月初ゝ三重てゝ後
間ゝ元人をわゝ坐てゝ上お入いゝ入ゝり絞入て中ゝ
ゝ日ゝ中ゝ重ゝく鹽ゝと入へゝ在氏絞者ゝくゝ白米ゝ升
ゝ水八斗入鹽ゝ煮て塩ゝ升入ゝく挿ゝ冷ゝ
四ゝ氏蓋他桶ゝ入ゝ中ゝ三ゝ日ゝ毎ゝ三ゝ日ゝ中ゝ酒と
ゝゝゝゝ中ゝ入ゝ中ゝ桶ゝ中ゝ元ゝ中ゝ有ゝ者ゝ桶
ゝ入ゝ元ゝ中ゝ中ゝ上ゝ中ゝ中ゝ中ゝ初

作ゝ入ゝ一日ゝ中ゝ元ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ
元ゝ中ゝ元ゝ中ゝ元ゝ中ゝ味噌ゝ中ゝ昆布ゝ中ゝ入ゝ中ゝ
味ゝ中ゝ中ゝ中ゝ

○ひりかの製法　大豆ゝ中ゝ大麦ゝ中ゝ塩ゝ升ゝ米ゝ中ゝ
麦ハ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ豆ハ焼ゝ引ゝ皮
ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ
ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ中ゝ

とうしの殼の内にてとうじてかくのごとくすべし

○濃かの細豆の製法　正豆壱升小麦粉壱升半生正豆

とうしてとけてこくなる黄熟し小麦の粉をとかして壱升

ほど入麹をすこしきて水壱升塩壱合入て能煮て

掬て入さましたる麹をとりさまして塩けのなくなる入又

煮て生姜の皮薄皮たてとこまかに刻て正

色とし麹一斗の塩けの用る入ふたをして

をりて正月塩けなくなるとき麹のくさ

さの中日をしてとりて味をくばりて麹を

まぜてまんべんなくまぜおきて壺に漬て重くし

○又納豆の法　大豆壱升大麦壱升塩壱合大豆をこまか

にしてこくなる黄をとりて粉にして大豆粉の

内に粉むしろをとりけて一夜置次の日多く

土間に入かしこに移して後塩と入水八勺ほどかけて

よく入て七日ばかり置新度さんをそのまゝ

朝麻薄皮をもて入三日ばかり粉をとりけて置こなし

日ばかりして又粉をとりて麻おしろをつきかけ

○金山寺殼の製法　和州法隆寺の秘方也　大豆一升ばかり

引ちり皮を去麻くしなとをもちひ大麦一升

能煮て細くこまかに大麦と麻揉

洗みて麻揉

の天気くもりて蒸し暑かりし時細末の麦粉
を捧世土器の入れ物せて麹しるしを麹塵の法
一つ日和に恭かて乾かしかつ風に吹かせ
合方麦を風と合の塩を合せ桶に入れ
一夜置明り上を麹をしくして風かけ
物干しさかさまに竹せて桶に入れ
毎日一度ずつ夜ふけ七十日許にて後蔵
神皮の穀物麦粉を混ぜ合せ
しくふきたてまつりけ毎日七十日
過ぎ用ひ味噌の法

○美年酒の製法

酒を用ひ米一斗乃中麦粉加ふ
実日より脇七十日をてくこれを用ひその
たるを洗ひ水と米とつて入毎度米をれいのごとく
蒸方麦粉を加へ又苦麦乃麦を刻てあく
入置いの米麦を敷き苦麦をいと
日和よき時桶を換へたる墻壁を修理をし又
海鼠乃毒を畢りて河井と流し足泥をとり去く
泥を入れ水気抜きるなり

元刀剣槍長刀鎗本と是月と夏とぬくいさんハ鎗ハ
花常八時をとりくぬくつゝ又ハ月名花百姿
ものをみるくしゝ
長尺故世と去法　養和　寛永　本整に二千ヶ　雄業　二千ヶ　別所　以上
紅葉して寒こて焼ものとしるしるとなれと楚と居家
花毒ものとてこうと龍乃骨を焼ハ蚊ハ蚊ハ毒ものとれ
骨ものとしとべこ川魚の骨ハ楚こハ蚊と去又
浮萍と蛇流と焼てものとと月令廣雅ものこ
こうと千金月令ハ月と浮萍と為く陰平ハ
雄黄ものとく楚こハ蚊を解と去ものこうと月

又日四年の浮萍と為蛇と蛇血と為くこれハ
漬と蛇と又漬すめとるるの蚊為して後来して
寒こ焼こ焼こ大ハ蚊蛇と去と居家毒ものこ
麻の葉とけこうハ
毒ものとこうハ毒ものとこうハ蚊とさるる物毒ものとこ
さるるものこうハ蚊乃ものとハ蚊乃ものとくこれ又くく蚊と
なるくくこ古今集毒乃歌ハ
為ものとハやとハ毒ものとハ蚊ものとハ月令ものこ
乃ものとこ　猪今大来蚊乃歌ハ
歌曰　相撲廣辯　去法蛇蛇蛇蛇蛇蛇蛇蛇

○又蠅多ゝわいまうなくなるを教案をひてのへまかく
生い擺死ること氣を抽新古感ゝ又蠅多ゝこと和
ゝ蒼蠅乃事と廉乃ちゝひ移る又ちやうぶ八藥と病
つゝくく庶ゝ志ゝくしゝと月令廣義ゝ又ゝこと
夏月乃乃世人異事ふあてゝ生ゝ用或遠中ゝ生く傷ゝ
病ゝ死する事ゝ乃ゝこれと中暍ゝ暍死ゝ傷ゝ
これと霍亂ゝ又ゝいあやまりゝ山蛭人ゝ水ゝひ
やゝくゝ涼ひや世ゝ部ゝ死ゝるものゝ冷湯ゝと
めくいゝゝるゝ死ゝし脇の男ゝあゝゝむゝしゝゝ
遠中ゝて死ゝ人事ゝ乃ゝ涼上の藥ゝ死

脇腹の乃ゝ世ゝ人ゝ人ゝしゝてゝの上ゝ部ゝ世ゝ一ゝ乃ゝ又薑ゝ
大蒜ゝとつゝ搗ゝ一ゝ藥湯ゝて送下ゝ世ゝ部ゝ吾ゝ代後
薬ゝとゝ人ゝ元ゝ保ゝ事ゝ乃ゝゝ
夏ゝ代乃天氣ゝ熱ゝくゝく汗ゝ病ゝ藥ゝ汗ゝ力ゝ勇ゝ迫ゝ
生脇散ゝ脇ゝ人ゝ一ゝ病ゝ乃ゝ八ゝ病ゝ乃ゝ汗ゝ
湯參茂參元湯ゝ乃ゝ病ゝと病ゝ乃ゝ生ゝ基ゝ
ゝ乃ゝ生脇散ゝ代ゝ一ゝと方藥ゝ又ゝ
黄茂 人參 白朮 黄芩 各一分 陳皮 草豆蔻 各五釐 五味子 五釐 麥門冬 五釐 甘草 五釐 右十味 或
加 蘇葉 一分 神麯 一分 黄柏

元異樂乃時杯軍と傳都して僧て鼓海をとりまかれ
寿世保元よりくく六月廿八房陽仙条六意之日又除夕人
のいとく夜四張乳用より伏し異蓋かと蒸すんまま
せく風よりあつり冷酒と食るあり暴地れ異と生れ温
暖たり掘と食飯して大よ飽るのかれ
鳳箏の形ちなるものの日よりてもあるとと浅るい実老流る枝
て多り多よ浅くし屋日事の葉しに清水とそしい
冷樂お通て新舞れよ楊とし月今裏義よ乃元とり又
老鼠乃を嚙よ銭事さめ用り用みくと渡り！渡るる
渡く ようと仙吸るおろく清朔ようちく渡く

月今廣寒のいとくく六月よ楊楊よ水とろく紀土とろい第
乃原羊の蜜と蹇ハ宗多し
秋の比鵬風秋雨ふくハ何ろくしめ冷と仙と冷し梅面と
鄙くし第瓦乃梅と嚙くと之しよ楊程まと仙ハし
比月蹇と食ハ目と賞す羊肉とろくハ祇事と湯乃
孫息廣警菓蹇と食るのと之よ生蹇と食ハ水瘢
とな犬のみよ嚙るれの紙乃蹇とな冷食と言
用し冷水生硯果油臓甜食とる食するのかれ
尾莫炒燻蹇乃原嚙宜くめく用ハし月今廣寒
元文乃百稍瓜と食するのかれ瓜のよ入て沈

ものハ大に毒あり と月令廣義ニハ瓜又いとくゝ
苦瓜 人と敵又油餅と共にしく食へし 沈物記
咸志ニ瓜ハ白梅と白くく蜜と合しく後
白梅と食へし又麝香をよく瓜と消化す又石蜜
と共食すれハ結瓜を消して水となるなり
六月乃六候 中一渡風 中二蟋蟀居壁 中三蘇乃
学習 大小暑乃三候 中一腐草為螢 中二土潤溽暑 中三大雨時行 大暑乃三候 中一
小暑 昼六十刻二十分 夜三十九刻四十分 大暑 昼五十
八刻二十分 夜四十一刻四十分 月令廣義

土用 又土王ともいふ 八土旺に於す
五行ハ木旺し夏ハ火旺し秋ハ金旺し冬ハ水旺す
故に四季ハ土ハ旺時なるゆへ土ハ四季に
分て配する 五行記に曰く 土ハ中央に居て四方
物を生ず 辰戌丑未月の末に寄旺す 寄旺とは
十八日一年に通じて七十二日なり此七十二日を
ひく 四季末 金水を又各七十二日づゝ
一年に合て二百七十六日なり 土ハ木と相克する故土
用ハ春夏秋の土用ハ土衰老して威なし 冬
乃土用ハ水と相克する故に土

用ひ中央に金を置き四方に四つ〳〵に土を置き中央に金を置き
の土用とし〳〵に四〳〵に土を置き中央に金を置き
あり秋乃金を土ともする事なり春は中央金の
百姓乃ウ又一説乃中百姓は中央の土一金を
さそよ掛さくあり乃の席となり乃を春土用金を
重箱に次に中央の土とのきそり（秋國信濃の百姓）
ところ〳〵その後たまれ
それ程なるなるか
俗説に六月土用に入日蘇及赤豆と食へハ疫疫と
雖とも今の人ハ〳〵くろ事なり それハ源氏物語
乃巻末に記せ こ ねちけさやくもちよ

俗説に六月土用に入日蘇及赤豆と食へハ疫疫と
雖とも今の人ハ〳〵くろ事なり それハ源氏物語
乃巻末に記せ こ ねちけさやくもちよ
人日麻子小豆名七枝と喜き疫疫を消すと云り
これこの菜初のまりなひ事と見えさうかの
事と俗人あやまりて六月よりすゝ牧地獄乃
人よ為あく〳〵
六月菜を六月土用乃中よ採そく
六月土用の日よ鼈とそう塩を付焼て食へ〳〵 泥濘下

回乃久しきやまぎるゝ風とくるれつゝ弱りゆく
養えたる病人は勇者能吾嬉と湯上風にやゝ
ゝ起きあがりつゝく苦てゝ

日本年号時紀巻之四畢

梅屋主人

文政十年七月調之